

読書のすゝめ

その14

H 27 7 / 7

七夕



まもなく夏休み・・・そうだ、本を読もう！
夏休みまで、あと〇日！と指折り数えてたのしみにしている人も多いことでしょう。

長い休みを有効に使ってほしいと思いますが、今夏はぜひ「読書」にも時間を割いてください。本を読み、自分と向かい合う時間を作り、心を育ててください。そして、読んで感じたこと、考えたことを文章に書いてみましょう。1、2年次生は国語の宿題となっていますが、3年次生もぜひ感想文コンクールへの参加を考えてみてください。

第61回青少年読書感想文全国コンクールの課題図書 を紹介します。

『希望の海へ』マイケル・モーパング（評論社）

第二次世界大戦後、イギリスから、オーストラリアへ、児童移民として、孤児が強制移住させられた悲しい歴史があった。全体は2部に分かれており、第1部は、10歳にも満たない戦災孤児アーサーがイギリスからオーストラリアに送られた後の人生が、第2部は、アーサーの娘アリーが父が設計・制作したヨットでオーストラリアからイギリスに向かう航海の日々が、それぞれ描かれています。

フィクションですが、背景となった児童移民は事実で、アーサーのように第二次世界大戦後に、労働力としてイギリスからオーストラリアなどの外国に送られた子どもたちが実際に10数万人もいたこと、その中には厳密には孤児と言えない子どもたちもかなりの割合で含まれていたことに、驚かされます。



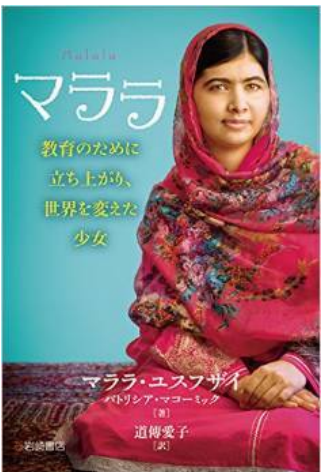
『マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』

女の子が学校に通う権利を訴え、タリバンに襲撃され重症を負ったマララ・ユスフザイさん。

いまイギリスで暮らす彼女が若い読者に語りかけます。

幼いころの思い出、家族のこと、タリバンの侵略、命をかけて訴えてきた「女の子が学校に通う権利」、襲撃を受けた「あの日」のこと、そして故郷から遠く離れて暮らす現在。

信念を持ち続けるマララさんにだれもが心を揺さぶられます。



『ペンギンが教えてくれた物理のはなし』

渡辺佑基（河出書房新社）

クジラやペンギン、アザラシなどの潜水動物や、アホウドリやウといった飛翔動物をはじめ、野生動物たちの生活は人間の目に触れず、その生態は謎に包まれたままだった。そんな観察が難しい動物たちに超小型のカメラや記録計を取り付け、データから行動や生態を調査する研究方法を「バイオロギング（bio-logging）」と呼ぶ。本書ではバイオロギングが明らかにした野生動物の多様でダイナミックな動きから、背景にある物理メカニズムを読み解き、その進化的な意義に迫る。

「物理の話」と銘打っているものの、いわゆる物理の教科書に出てくるような公式の類いは登場しないし、「生物の運動もある条件下では力学で説明ができる」という、生物学の補助的な役割



として物理が登場している程度なので、生き物が好きで、野生の生き物をどうやって調査しているのかに興味があれば、ぜひ読んでみてください。

※夏休み中の本の貸し出しは1～7冊です。

※7月中旬に蔵書点検を行いますので、7月23日から31日まで本の貸し出しができません。

学習室としての利用はできませんが、蔵書点検中で落ち着いて学習できないかもしれません。了承願います。

